

平成29年度研究科横断型教育プログラム（Aタイプ）授業科目

開講方式	Aタイプ (研究科開講型)	研究科名	総合生存学館	カテゴリー	国際性・コミュニケーション科目群	横断区分	文理横断型				
授業科目名 (英訳)	科学・学術と社会のコミュニケーション (Communication between science and public)		講義担当者 所属・職名・氏名	総合生存学館・准教授・磯部洋明		開講場所	東一条館 116 セミナー室				
配当学年	修士 博士後期	単位数	2単位	開講年度・開講期	前期	曜時間	木2限 (10:30-12:00)	授業形態	実習	使用言語	英語及び日本語
〔授業の概要・目的〕											
<p>科学技術・学術研究に携わる者にとって、社会の他のセクターとのコミュニケーションの重要性は増大してきている。近年では広報やアウトリーチよりも科学コミュニケーションやパブリック・エンゲージメントといった言葉がより頻繁に使われるようになってきていることから分かるように、科学・学術と社会のコミュニケーションは単なる研究成果の周知広報ではなく、専門家と非専門家間の双方向の対話や、研究者以外の人々の能動的な参画が重要視されてきている。この授業の目的は、実際に受講生が科学・学術と社会の対話を目的にした企画を立案・実施することを通して、科学・学術と社会のコミュニケーションにおける様々な課題と必要なスキルを実践的に学ぶことである。講義やディスカッションは原則として英語で行うが、実習・実践の部分は必要、目的に応じて日本語で行うこともある。</p>											
〔研究科横断型教育の概要・目的〕											
<p>理工系分野だけでなく、科学技術や学術研究と社会の関係に関心をもつ様々な領域の学生が、専門領域以外の一般社会とのコミュニケーションにあり方について実践的に学ぶことを目的としている。</p>											
〔到達目標〕											
<ul style="list-style-type: none"> ・科学技術、学術研究と社会の関係に関する現代的な問題について学ぶ。 ・科学コミュニケーション実践の場で必要なスキルとリテラシーを身につける。 											
〔授業計画と内容〕											
<p>まず科学・学術と社会のコミュニケーションにまつわる背景やこれまでの研究を講義形式で概説する。現在必要とされているコミュニケーションがどのようなものかを、実例等を参照しながら全員で検討し、授業全体の取り組みとして後半に行うイベント等の目的と大まかな概要を検討する。中盤は「国民との科学技術対話」に関わる学内の関係者の指導と協力を得つつ、実際の対話やプレゼンテーションスキルを学ぶ。後半は実際の科学コミュニケーションイベント等を履修生がチームで企画・実施する。</p> <p>第1回 インTRODクシヨ(講義) 第2,3回 科学コミュニケーションの歴史と現状(講義) 第4,5回 科学コミュニケーションの実例調査及び企画の予備的検討 第6,7回 研究紹介実習(実際に非専門家に向けた自分の研究紹介ポスターを作成してみる) 第8,9回 学外のゲスト等を招いた対話の実習 第10-11回 企画検討 第12-13回 科学コミュニケーションイベント等の実施(授業時間外になる可能性もある) 第14-15回 結果の解析及び考察</p>											
〔履修要件〕											
特になし											
〔成績評価の方法・観点及び達成度〕											
平常点評価(出席、授業中の発表 100点)											

〔教科書〕

Sir Walter Bodmer 『Successful Science Communication: Telling It Like It Is 』(Cambridge University Press)

〔参考書等〕

藤垣裕子, 廣野喜幸 編, 『科学コミュニケーション論』(東京大学出版会)
小林 傳司 『トランス・サイエンスの時代?科学技術と社会をつなぐ』(NTT 出版)
中村征樹 編 『ポスト 3.11 の科学と政治』(ナカニシヤ出版)

〔授業外学修(予習・復習)等〕

授業の実習として行う科学コミュニケーションイベント等は授業時間外に開催する可能性がある。また、授業中に紹介する学内外の様々な科学コミュニケーション関係のイベント等への積極的な参加(参加者として又は企画運営側として)を期待する。

〔その他(授業外学習の指示・オフィスアワー等)〕

質問等は随時メール isobe@kwasan.kyoto-u.ac.jp で受け付ける。